

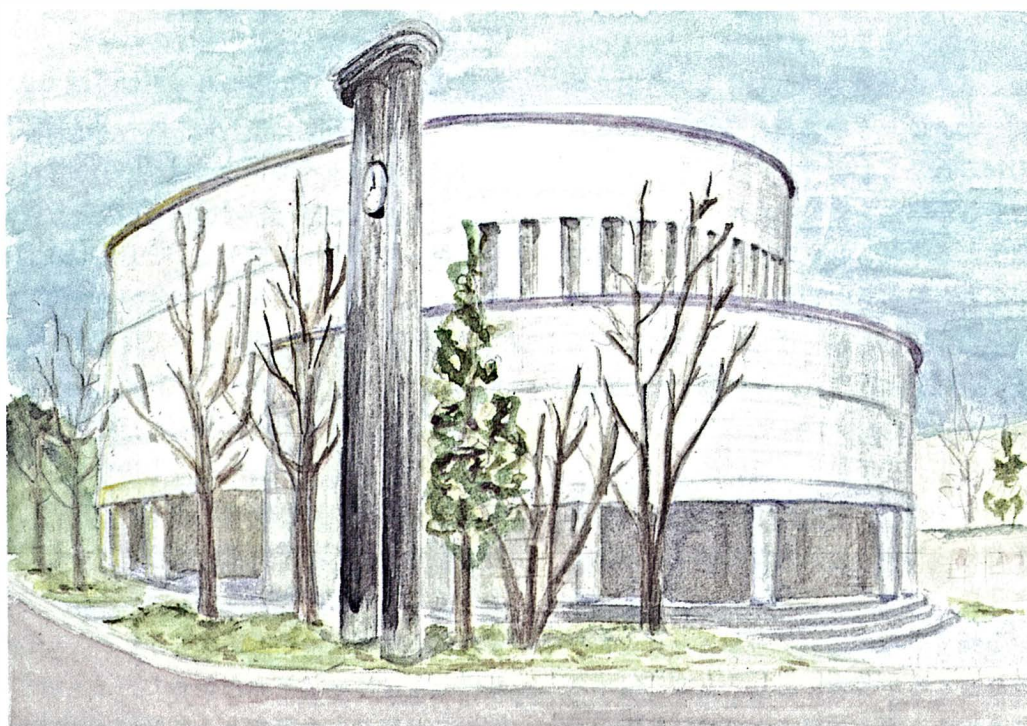
# 学園ニュース

富山大学

NO.67

編集 学園ニュース編集委員会 発行 富山大学

平成2年2月13日



学内風景（その30）

黒田講堂

教育学部・薮内朋子

## 目次

卒業生へのはなむけの言葉 .....	各学部長及び経営短期大学部部長 .....	2
退官にあたって .....		9
新任教官紹介及び挨拶 .....		15
思い出のまま .....	理学部助手 小松美英子 .....	18
黒田講堂の落成式について .....		19
黒田講堂の管理運営について —— 中間報告 ——		
	黒田講堂管理運営検討委員会委員長 武 暢夫 .....	20
真ごころからの感謝 .....	外国人留学生（経済学部）雛 姫 .....	21
臨別述懐 .....	外国人留学生（教養部）高 立 .....	22
学生部だより .....		23

## 卒業生・修了生へ

人文学部長 三 寶 政 美



わが家に名ばかりの庭があり、造って10年余になる。かつては若木だった庭木もそれらしき樹木の風采を帯びてきた。折しも夜来の雪で枝えだは白く飾られ、そこへ朝の光が差し込んで、きらきらと目にまばゆい。

思えば諸君らも入学した頃は若木のようなだった。ひょろひょろと立って、どこに向かって伸びていこうかと心細そうに大空を見上げている風だった。それが卒業をまのあたりにした今になると、人文学部生たるそれらしき表情を獲得してくるから妙だ。毎年のことながらおめでとうと精いっぱい口では言いながら、心ではこみあげる一抹の淋しさを抑えかねている。教師とは因業な、と思うのもこの季節ならではの。

庭といえば、ここ二、三年親しい思いを抱いて下りていないことに気づいた。たしか昨年の盆前には例年のように雑草をむしったが、それもおさなりにしたようだ。以前のように一木一草に心をとめ、草の下石の下に生息している蟻やみみずにいじらしさを覚えたかどうか、いやそれどころか邪険にあしらってしまった気さえする。あくせくとゆとりなく生きている証明であろう。何事にも余裕がないと、人は感性を失い、弾力性と寛大さに欠け、ひいては世の中も画一的な傾向に陥りがちとなる。

こんなことをいうのも、近頃新聞等で話題になった「伝習館判決」が心にひっかかっているためである。私は当の先生たちについてはなにも知らないで、一般的にしか言えないが、それにしても学習指導要領を法規に定め、それからはみだした教師を法が処罰するのは賛成しかねる。戦争直後に育った私達の周辺にはそれはいろいろな先生がいたものだった。おかげで学力はつかなかったが、子ども心にも良い教師、だめな教師を識別する目を培ったし、さらにはよい教師にも欠点があり、だめな教師にも良いところがあることを知ったものである。高校に入ると、さすがにそうそうたる教師ばかりだったが、中にはそうとも言えぬ先生もおられた。「やっこ」とあだなされる物理の老教

師がいた。そのあだなの由来は学識すでに枯れきり、毎日の授業をやっとこさしのいでいるためにつけられたものであった。理系の学友らには軽蔑の対象とされたが、文系の者達にとってはおたすけマンであった。理数嫌いの私などには神にも見まがえ、なんとか卒業して今あるのも先生のおかげであったと感謝している。かつてのそうそうたる教師たちは今では忘却の彼方であっても、「やっこ」先生のお名前は、ここでは明かせないが、私の心中にあっては不滅である。

もっとも「やっこ」先生は、「伝習館判決」とは無縁な方ではあろう。しかし私の恐れはこの判決が「やっこ」先生のような教師の存立をも脅かすことにつながっていくことである。そしてはみだした教師を除去しようとする余りに、先生がみんな画一的になってしまったら、子どもにとっては悲劇である。こんな思い出がある。もう3年前のことである。私の教え子同士が結婚することになって、披露宴の司会を二人の友人に依頼した。司会の二人もまた私の教え子であって、学生時分よい意味で私は無頼に指導してきたつもりでいた。ところで当日の司会ぶりを見て驚き、また笑ってしまった。というのは二人がよく本屋の店頭でみかける「××司会必携」なるものの記述そのままを踏襲して進行させていたからである。晴れの舞台に失敗があつてはと大事をとる友情は理解できるにしても、マニュアルどりにする余り、普段使い慣れぬ敬語を使ってとちったり、悪友達をこともあろうに「ご学友」とまで言うことはあるまいに。しかもこの二人がいずれも中学校の教師であったことに考えさせられるものがあつた。だからどうだというつもりはない。実際この二人はそれぞれの現場にあっては生徒に慕われる熱中先生であつて、けっして俗に言う画一的な部類に属する先生ではない。ただこのような「判決」が出た後に、それが一人歩きしていつしかマニュアルになってしまわぬとも限らない。そういう土壌がすでにあること、それが恐い。

画一的といえば、もう一つ身近な話をしよう。昨今では企業、官庁を問はず給料は銀行振込制を採用している。しかしわが富山大ではつい最近まで手渡し制であつた。その頃給料日の17日は一ヶ月の中にあつてさんぜんと輝いていた。昼ごろに手渡されるのが常で、

午後の授業ともなると、背広の内ポケットに収まった給料袋がカサカサと私だけに分かる音を立てた。我が家に帰れば、女房がとっておきの笑顔で迎え、給料袋は形だけ女房の手で仏壇に供えられると、その後は待ちかまえている子どもらが競いあって札を数えたものである。安月給ではあっても、子どもらにとってはそれなりに大金である。「お父さんってすごいんだね、うちは金持ちなんだあ」と彼らは目を輝かせ、父親を尊敬の眼で見上げる。それは誤解のうえに成り立ったやがては崩れる脆弱な幸福ではあったが。

毎月の給料日がこれであるからして、たまさかのボーナス日ともなれば、たいへんである。授業中に立てる内ポケットの音はガサガサといっそうその存在を誇示した。当時は自転車通っていた。校門を出ると、この日ばかりは行き交う人々の目が陰しく見え、何度も振り返ってはつけている人がいないか確かめた。とく

に夜道の神通大橋を渡るときなどは不安で心臓の鼓動が聞こえる思いだった。この夜、女房子どもらの歓待が月づきの給料日の何倍ものものであったことはここに改めて語るまでもない。

手渡し制がもたらした家家の対応はそれぞれにしても、それぞれの家家の幸福感につながっていたような気がする。だがそれらは今や語り草となり、銀行振込制が定着した今日、女房は「亭主は元気で留守がいい」とうそぶき、子どもらにとって父親の存在は遠くかすみがちとなってしまった。

かように現代の日本は、生活の高度化と反比例するかのよう人間的な状況が急速に失われつつある。それはすなわち人文学部のよってたつ基盤の侵食である。人文学徒たる諸君がこれから先どのような生き方をされようとも、人間的なものを追求し続けることを基底に生きていってほしいものと願っている。

## 卒業生・修了生へのはなむけの言葉

教育学部長 山地啓司



卒業生ならびに修了生の皆さま、ご卒業おめでとうございます。

9年間の義務教育と高校・大学での7年間（専攻科修了生は8年間）の高等教育を通じて、頭脳と身体と精神を鍛え、今、実社会へ新たに旅立たれる皆さまに対し、私は学

校教育の今後について所見を述べ、もって饒けの言葉に替えさせていただきたいと思います。

もう20年余りになりますが、アメリカの著名な社会学者ハーマン・カーン博士が来日されました。当時、博士は“未来学”を提唱し、世界的に脚光を浴びていました。日本各地での講演会では、社会学者だけではなく、当時の経済界の指導者達をも魅了しました。博士は日本人の聴衆を前にして、次のように語りました。「近い将来、日本経済は世界経済を制覇するでしょう。なぜならこれからの世界は、コンピューターにしろラジオにしろ自動車にしろ、コンパクトな物が好まれるようになり、そして日本人は物をコンパクトにする名人だからです。日本で作られたこれらのコンパクトな

物が、大量に日本の港から輸出されるようになります。そうです、21世紀は日本のためにあるのです」云々。その頃、大学院生であった私達は、博士を称して“ほらふきじいさん”と呼んでいました。彼の言葉は当時、全く信じられなかったからです。しかし、20年後の今、彼がかつて予言したことが着々と現実のものとなっているのです。これはどのような理由によるのでしょうか。様々なことが考えられますが、私は日本の学校教育の成果と捉えています。

戦後のわが国の学校教育は、“詰め込み教育”をその特徴としています。すなわち、既知の事象をより正確に、より速く、より永く記憶する能力と、数学のように原則に合わせて類題を解く能力とが尊ばれます。学校の成績評価はこの二点に集約されるといえます。その反面で、筋道を立てて理論的に物事を考える力（思考力）、新しい物やアイデアを創り出す力（創造力）は低く評価されがちです。こうした特性は、たとえば、斬新なアイデアや将来の科学発展に寄与すると思われる発明・発見に対して贈られるノーベル賞の受賞者数の少なさに窺われ、あるいは、工学技術のアイデアの売買収支を示す技術貿易収支等が他の先進諸国に比べて極端に少ないことから実証されてい

ます。韓国・梨花大学の李御寧教授によれば、日本の企業は新しい製品や技術の開発は苦手であるが、新規に開発されたものをもとに、品質や価格に重点を置いてそれに似たものを造っていくのが得意だとのこと。欧米人は「馬を引く人種」であり、日本人は「牛を追う人種」であるとよくいわれますが、これまでの歴史は欧米人が馬を引くごとくに世界の先頭を切って進み、日本人は牛を追うごとくその後からついて進んできたといっているでしょう。

明治維新後の日本、あるいは“欧米先進諸国に追いつき追いこせ”をスローガンに奮闘していた終戦後の日本では、これまでのわが国の学校教育（知識の集積と類似性の応用能力の育成とを旨とする）は期待以上に実を上げ、その機能はいかなく発揮されました。しかし、今日の国際化社会における日本の位置を省みれば、もうかつての諸外国への追随だけでは許されなくなっているのです。日本経済は世界経済をリードする立場に立たされており、世界は日本のリーダーシップに大きな期待を寄せています。日本人の国際人としての真価が今、問われようとしています。

そうした時代にあって、なお日本の学校教育は記憶力と応用力の偏重という旧態依然とした状況に留まっていますよいいのでしょうか。今こそ、物事を深く考え本質的に対処できる、思考力と実行力が求められています。新しい時代を切り開く創造力が尊ばれる時代なのです。変貌する社会の諸ニーズに応えるためにも、学

校教育は大きく変革されることが望まれます。そのような時代に教壇に立たれる諸君には、これまで君達が受けてきた教育を忘れ、国際人として活躍できる人材を養成していただきたいと思います。世界のリーダーとしての素養を身につけられる、新しい創造性の教育が諸君の手によって打ち立てられることを願ってやみません。

また、教職以外の道に進まれる諸君に対しても、一言申し述べておきたいと思います。これまでに受けてきた学校教育では、人間の能力のある一面に限定して評価を下していたのに対し、これから飛び込む実社会では、創造性をも含んだ総合力が問われています。そうしたことに気付かざるをえない局面に諸君もしばしば遭遇されることでしょうか。これから赴いていこうとする社会は、君達がどこで何を学んできたか、といういわば諸君の「過去」に期待しているのではありません。学窓を巣立つまでに得た教育の成果を基盤にして、斬新なアイデアと創造力、加えて果敢な行動力がどれほど諸君の内にあるのか、また、それらが会社やひいては社会に対してどれほど貢献できるものなのか、これらの観点から評価が下されるものと思われます。各自の職場で“競争の精神”と“和の精神”を忘れることなく努め、自己の道を邁進してください。

最後になりましたが、諸君の前途に幸多からんことをお祈りいたします。

## 経済学部卒業生の皆さんへ

経済学部長 吉原 節夫



まず、皆さんのご卒業に対して「おめでとう」と心から祝意を申しあげる。経済学士の卒業証書を手にした皆さんの晴れ姿を見て、ご両親やご家族はさぞかしお喜びのことであろう。いずれ皆さんがわが子をもったときに実感できることであるが、皆さんのご

卒業もこれらの方々の方心にわたるご支援によるものであることに思いを致し、皆さんは喜びを共にするとともに「感謝」の気持をもたなければならない。

ところで、大学の卒業式を英(米)語でcommencementというが、この言葉が物事の「開始、始まり」をも意味することは、皆さんも先刻ご承知のことである。確かに、皆さんのほとんどは学校教育を修了するけれども、卒業して実社会に入ると同時に、もっと実際の・専門的で本格的な勉強が始まる。企業や団体の一員となって業務に必要な新知識を修得し、多くの国家法や地方自治体条例・規則の適用を受け、新しい人間関係に対応しなければならない。

われわれは、皆さんに基礎的・基本的知識を授けたにすぎないが、学び方(自己学習力)、考え方(思考力)を身につけるよう努力したつもりである。これか

ら一層、自己啓発と能力開発に意欲的になってほしい。高等教育を受けた皆さんは、学ばず学ばずほど、なお学ぶべきことがいかに多いかを知り、いかに知らないことが多いかを知っている。また、わが国の社会経済や世界経済の変化、技術革新等は今後も続き、各自の事業環境・家庭環境に影響を及ぼすであろう。皆さんの卒業前1年は、まさに激動の年であった。洋の東西において歴史に大きく記録される事件が相次いだ。天安門事件、ベルリンの壁の崩壊、東欧諸国の民主化への激変等々。これらの大事件は、われわれにこれから調査し考察していくべき幾つもの課題を投げかけた。さらに、地球環境問題、その他グローバルな課題も迫ってきている。皆さんは、社会生活を送る中において、できるだけ見聞を広め、読み、考える時間をもつように心掛けてほしい。

仕事上はもとより家庭生活においても、学生時代に比較して一層厳しく「正確」さが要求されると考えられる。物事を正確に把握し、正確に報告し、正確に書きとめ、正確に処理することが要請されて、間違いに対しては否応なしにリアクションが出てくるであろう。駄目押し、「確認」するという習慣をできるだけ早く身につけねばならない。辞書類を「座右に」置き、直ぐ確かめることを怠らないように。

とはいえ、われわれは全智全能ならぬヒトの身、過ちをおかすことは有り勝ちである。皆さんのような職

場の新人は、いろいろミスを指摘され注意されることが多いだろう。腐るなかれ、萎縮するなかれ。誤りを恥じ、これを直すことによって本当に正しい知識が身につく、人間が成長していく。「改過自新」（過ちを改め自らを新たにす）。したがって、「過ちては即ち改むるに憚るなかれ」。

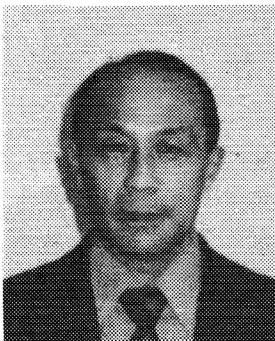
自分自身に「自信」をもってほしい。過信はいけないし、自慢は人のひんしゅくを買う。自分に相当の秘めたる自信をもつべきである。皆さんは、伝統ある富山大学経済学部の所定の課程を修めた経済学士である。未だ浅学非才であり経験が乏しくとも、1年後、3年後、10年後の自分を必ず成長させるという信念と自信をもつことである。われわれ教師は、過ちを重ねていた学生時代に比べて一まわりも二まわりも成長した卒業生を数多く見ている。皆さんも、元気よく、堂々と、そして着実な歩みを進め、先輩たちに続いていただきたい。

1年先輩の卒業生に対する言葉の中で、「挨拶を大切に」とも書いた。私の周囲を見るかぎり、今年の卒業生には良く挨拶をしてくれる人が多かったと思っているが、これからも、同様に留意してほしい。

以上、ご卒業を祝し、はなむけに若干のキ・ワードをお贈りする。最後に、皆さんのご健勝とご活躍をお祈りする。

## 使い捨てる時代に

理学部長 小黒千足



少し前，“短小”“軽薄”がもてはやされ、重厚さはもはや旧人のたわごとのようにすら思われていたような感があった。多少意味が違うようであるが、私達が常時使う試験管、注射器や注射針などを例に取っても、このことは良くあてはまる。昔は幾度も使えるように、丈夫でしっかりしたものを作り、使用後はよく洗い、消毒し、出来るだけ長持ちするように、丁寧に使ったものである。勿論、現在でもそのように作られたものが無いわけではないが、多くの場合プラ

スチックが主体であり、数多くの使用には絶えられないくらいで、一度使った後は廃棄するようになっている、いわゆる、デスポーザブル仕様である。これには、そのような材料が豊富に、安く作られるようになったことが貢献していることは勿論であるが、それよりも洗浄、消毒などにかかる時間や人手が惜しく、供給が充分であれば、そのほうが時間的にも経済的であることによるのであろう。

日常使う容器なども殆ど総てにこの傾向があり、スーパーマーケットで販売される食品の容器は云うに及ばない。さらに、家庭で使う器も、昔は桶、かめ、樽など半恒久的であったものが、いまでは多くの物はプラスチック製で長時間の使用に耐えるようには出来てい

ない。

ところで、物に対してのこのような考え方は、心にも影響を与えるのは当然である。実は心が先で、それが物に反映しているのかも知れないが、何れにしても、このような思想が心にあるときには、人生観にも影響を与えるように思われる。新聞、雑誌などで知るかぎり“遊民”的人生をおくる道を選ぶ人が多くなったような気がするが、いかななものであろう。卒業に際し、固定した職業を選ばず、フリーアルバイター（妙な語であるが）になるという学生さえ現れるようになってきた。

話は変わるが、最近の学生の就職状況は空前の売り手市場であると言う。事実、2年も先の学生の就職を依頼に来る会社がある昨今であり、脱サラの成功例が紙面を賑わしている状況や、雰囲気にも影響されてか、学生側の心理状態も緊迫感が少なくなっていることは確かなように思われる。

動乱の時代にあっては、先を考え、堅実に人生設計をすることは難しく、またあまり意味のないことであろう。しかし、現在は本当に動乱の時代であろうか。それについては意見の分かれる処であろうが、ここではその論議に立ち入らないことにする。

日本では一生涯雇用が主流で、転々と勤め先を移るのは、あまり良いことではないとされていた。しかし、最近の事情は多少違っており、別の企業に（例えそれがライバル企業であろうとも）より良い条件で引き抜かれることがあり、もう一度元の企業に2階級上がって迎えられた例まで現れた。このような風潮も学生の

就職観に影響を与えていない訳はないように思われる。

しかしながら、最後の例などは、たぐい希な才能を持つ人であったことであり、普通の人には縁のないことである、と云うことを忘れがちである。

ところで逆の側を考えてみよう。上に述べた思想は本当に学生側だけのものであろうか。企業側には相変わらず昔ながらの考えが定着しているのであろうか。これについて考えてみる必要は無いのであろうか。先日、私のところを2年前に出た学生が遊びに来て云ったことは「最近は何もありませんよ。寝ないでこなしても仕事は残るばかり、受注が増えると年休や週休2日は夢物語です。同期の入社仲間もう半分止めました。私もいつまでもつかかわりません。」これは、出社にフレックスタイムを導入している大手の先端企業での話である。このような話を聴くと、企業もまた雇用している人をデスポーザブルとみている気がしてならない。

ここで私は教訓を与えるつもりは全く無いし、またどのような道を選ぶのが正しいかと言う判断を示すことは出来ない。ただ、思っていたまを素直に書いたつもりである。

いま卒業して行く諸君には“遊民”を指向している人は少ないであろうが、そのように生きてゆくには、特殊な才能が必要であると云うことを指摘しておこう。さて、就職を選んだ諸君、君は今やデスポーザブルの時代に生きてゆかなければいけないのだ。はたして、使い捨て要員にならないでやってゆけるかどうか。

## 工学部の卒業生諸君へ

工学部長 作道栄一



工学部院生及び学部生の皆さん、長年の蜚雪の功あって、愈々社会への船出の日を迎えられることになり本当におめでとうございました。父兄の方々の安堵と喜びはいかばかりかと察せられます。さて、皆さんの就職の方向が決まったのはほとんどが昨年の早い時期であったかと思いますが、その就職戦線は例年と

は違ってかなり趣きの異なった傾向がみられました。第1は入社試験とは名ばかりで学生一人に対して数十社からの求人があったために、寧ろ学生諸君が会社を吟味する入社試験(?)の感があったこと、第2点として就職先は2次産業だけではなく、商業、サービス等の3次産業の分野へも進出したことです。このうち前者は数年来よりみられた現象ですが、昨年あたりより全般的に顕著になってきたという事で特筆されるべきでした。後者は今までにはほとんどみられなかった事で就職ガイダンスに接した諸君も多少違和感を持つ

た事と思います。それでも可成りの数（我々技術者サイドから見ての数）が指向したと聞きました。この後者の現象はよく認識しておく必要があると思います。例えば、報酬が2次産業界よりも多い等の一元的理由の単なる一過性ものではありません。また勿論のことながら、所謂偏差値教育の歪みの結果でもありません。社会全体の回転がしからしめているということです。最近では社名をみただけでは事業・内容がよくわからない会社が多くなってきています。また、事業内容が判別できない社名への変更も多くみられます。だんだん、名はその体をあらわさなくなってきました。これは今までの工業生産の分野において単一生産技術から学際的複合生産技術へと産業界、引いては社会の構造的変化が進んできていることにその理由が求められるべきです。換言すれば、それによって社会的価値観が次第に多様化してきているということです。生産技術が複合化するということはそれを進めるためのシステム化技術が必要であり、それがまた社会的ニーズの多様化に繋がってきます。逆の面からみれば、3次産業界にもシステム化技術が必要になった（浸透してきた）という事をも意味すると思われまふ。繰返しますが、今社会は速い速度で回転（変化）し始めています。社会的要請から改良または開発された技術による変革は、その技術そのものが原因となって将来さらに加

速度を加えて行くと考えられます。皆さんが将来、功なり名を遂げたときは社会はどのような状態になっているのでしょうか。現在とはかなり変わっていることでしょう。

今日の多様化する社会的ニーズの流れを見つめたとき我々は少なくとも次の様な点に留意すべきかと思ひます。技術開発に何らかの意味で関与するのは工学技術者ですから、これに対処するには何と言つても一義的に工学基礎知識が必要です。学際的先端技術への展開には工学基礎知識を十分に身につけ、それに加えてエンジニアとしての強い目的意識を持っていることが総ての基盤となります。この工学技術者としての必須要件が満たされておれば、現在の生産技術が社会ニーズの多様化の要請に対して適応性を欠く事態になつても、適切な生産技術水準に合せた新技術の開発へと展開することができます。このことに十分な自覚がなされておれば皆さんの未来はどの分野への船出であってもバラ色に輝くことになるでしょう。何卒、皆さんの持っている溢れるばかりのエネルギーを今後とも基礎的学問分野と応用技術分野に傾注して自己研鑽の糧とされることを願つております。それが工学技術者として社会の発展に寄与しうる唯一の途であると信ずるからです。

終りに皆さんには健康を専一に心がけられ、益々の御健闘を祈念して止みません。

## 最後の卒業生を送る



富山大学経営短期大学部（以下、短大と略称）は本年度を以て最後の卒業生を送り出し、ここに31年間にわたる歴史のページを閉じます。

本学部は昭和34年4月に経済学部を母体として開設されて以来、勤労者・社会人教育に力を尽くし、それなりの成

果をあげてきたのでありますが、昭和60年度の経済学部の昼夜開講制への改組によって廃止されることになりました。この間の事情については、周知のことでしょうし、『学園ニュース』52号にも元短大主事であり、元経済学部長であった龍好英元教授の要を得た解説が

経営短期大学部部長 武 暢 夫

ありますので、詳細は繰返しません。要するに、勤労者・社会人教育の任務を果たしてきた短大も社会状況の変化に応じた形態転換が必要となり、それが短大の経済学部への吸収と夜間主コースの設置という形で実現されたということになりましょう。

すでに、一昨年3月10日には、やや早目ながら、短大の閉学式が挙行され、同月25日には短大の殆んどの学生が卒業しました。しかし、なお数名の学生が残留したのであり、これらの学生の在学期限が切れる平成3年3月までは在學生のあるかぎり、短大が存続することになります。そこで、われわれ短大関係者は在學生のすべてが卒業の条件を整えてくれることを切望し、そのためにできるだけの便宜を図ってきました。このような期待に応えて、昨年度には、1名の学生が卒業

しました。ちなみに、この学生は実施されたばかりの夜間主コース3年次への編入学生となり、新たに勉学に励んでおります。まさに、われわれの期待に十分応えてくれたものといえましょう。

しかし、なお残留する学生がありました。われわれはこの最後の学生にも、先の例にならって、初志を貫いて卒業してくれるよう期待しました。実際、教務関係の教官には当該学生とたえず連絡をとり、指導と激励につとめていただきました。それでも、学生本人にとっては人知れぬ苦労があったことでしょう。忙しい勤務を終えた後の授業は、ただでさえ辛いことですが、同期の友人たちがすべて去った後の孤独と寂寥にたえて、残された単位の修得につとめる気持は大いに推察されます。これにたえるには、かなりの精神力が必要でしょう。

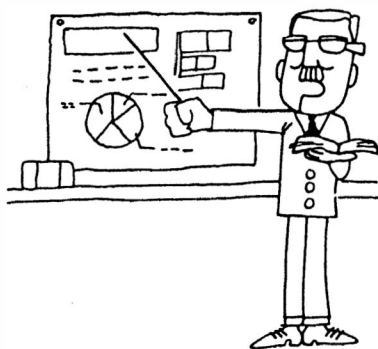
もっとも、こんなことは筆者の感傷にすぎず、本人にとっては大した負担にならなかったかもしれませんが、それならそれで、その強靱なる精神力には益々感じ入ります。一般的に言えば、他人に先がけて何事かをなすのが難しいことなら、他人への遅れを取り返すことにはまた特別の難しさがあるのではないのでしょうか。

いずれにしても、本人の最後の頑張りが実を結び、われわれの期待はかなえられました。短大を卒業した

かどうかは、本人の現在の生活にさしあたって直接影響しないかもしれませんが、何かの機会に役立つこともありましよう。しかし、今回の卒業はそれ以上の意味もっています。まず第一に、普通の学生にはわからない困難を克服して目的を達成した経験は求めてもえがたい貴重な経験でありましよう。さらに、この卒業はそれによって短大31年の歴史に終止符を打ち、短大の形態転換を、けじめをつけて完了せしめるという歴史的意義をもつものであります。

このような意義をもつ卒業はざらにあるものではありません。もっとも、形態転換とはいえ、短大が遂になくなってしまふことには、一抹の寂しさを禁じえないでしょう。しかし、いくら強調しても、しすぎることはないと思いますが、短大は経済学部夜間主コースに転生し、この中に勤労者・社会人教育の伝統は生き続けていくのです。ちょうど、今年度は夜間主コース最初の卒業生が送り出されるのであり、まさにその年に短大最後の卒業生が送られるのは、短大から夜間主コースへの見事なバトン・タッチを見る思いであります。

このように、経営短期大学の幕を閉じるにふさわしい役割を果たした本学部最後の卒業生の努力に敬意を表するとともに、今後いっそうの活躍と発展を期待するものであります。



## 平成元年度定年退職者

人文学部	文部教官	教授	楠 瀬 勝	工学部	文部教官	教授	三 上 房 男
理学部	”	”	川 瀬 義 之	”	”	”	中 谷 秀 夫
”	”	”	横 山 泰	”	”	”	柳 瀬 秋 夫
工学部	”	”	宇佐美 四 郎				

平成2年3月31日付けで7名の教官が定年退官されます。退官に当って思い出や感想等を語っていただきました。



## ユリノキのように

人文学部教授 楠 瀬 勝



私は本年3月をもって定年退官になります。昨年末、「あと1年ですね」、「退官の感想はどうか」、正月早々には「あと3カ月ですね」等々、挨拶をうけ、また自からも「今年度で退官です」と申したりしてはいますが、正直なところ現在でも余りその実感がありません。この1年間、出来るだけ退官ということ意識しないようにして、すべての面で従来通りのペースを崩さないことを心掛けてきました。教授会は皆出席、自分の属する各種委員会にも欠席しないように務めました。講義では、他コースの学生も受講する授業科目を担当することは少なかったのですが、演習では最後は甘くなり楽であったといわれないように実施した積りです。だからこのあと単位認定でも退官ということで祝儀的に単位をふるまうようなことはありませんので、受講生諸君は心して下さい。いまだに退官の実感がもてないでいる理由の一端は、こんな過し方にあるのかもしれませんが。それはともかくとしてこの度退官を迎えるに当り、矢張り何よりもまず、これまで長年にわたって、先輩・同僚の教官の方々からたまわった知遇や温情、多くの事務職員の御援助、共に学んだ多数の学生諸君との親交に対して、厚く感謝し衷心よりお礼を申上げる次第です。

私は昭和29年に京都大学人文科学研究所に奉職し、40年1月から当時の文理学部へ赴任してきました。それ以来、早や25年にもなりますが、当初は全く予想もしなかったことです。この間、富山大学は全体的に大きく拡充発展をとげたと痛感します。25年前赴任して間もない頃、本学の職員から自嘲的に「富山大学は4流大学だ」といわれ、愕然としたことを忘れることができません。勿論その時、「4流なら3流へ、3流なら2流へ……、引き上げるようお互いに努力しよう」といいかえました。何を基準に1流2流3流…というかは問題ですが、当時と較べると現在では本学の学部構成は発展的に改編され、教官数・学生定員も格段

に増加し、内容的にも整備充実されたことは疑いないところです。私の所属する人文学部についても、昭和42年に文理学部から教養部が独立し、52年には文理学部改組によって人文学部と理学部が分離独立しました。その後、人文学部ではさらに一部学科目の補充整備ははかられ、61年には大学院人文科学研究科が設置されました。こうしてみると建物の完成はまだですが、25年前の文学部の頃には考えられなかったような飛躍的發展をとげたといえますし、今日の人文学部は他大学の同系学部と比較しても決して勝るとも劣らない充実した内容になっています。しかしながらここに問題なのは、単に人文学部だけでなく、富山大学全体についても、内実の発展にともなうイメージ・アップが果されていないことです。世間で一般化しているイメージはどうにも強固であり、その転換をはかることは如何に難しいか痛感させられるところです。イメージなんて感性上のことで、どうでもよいともいえますが、他大学との比較でその良し悪しが顕然としていると、そのことが内実の格差の助長に大きくはねかえってくることも事実であります。現在は内実の一層の充実発展をはかりながら、イメージ・アップさせることが急務と考えます。このためには当り前のことですが、秀れた研究成果を多く生み出すことが重要ですし、卒業生のめざましい活動にも期待しなければならないし、さらには意欲ある学生が多く参集してくるような学園づくりも必要で、それには建物施設・環境の整備も無視できないことでしょう。その他、相関連する具体的な方策を総合的に組立て、それが実現されることを切に願うものであります。

今や富山大学のシンボリック的存在となっているユリノキは、研究室の窓からみると前面に立並び、四階の高さまでに達しています。これほど四季の移りかわりを鮮かに教えてくれたものはありませんが、今しばらくこのユリノキともお別れです。このユリノキはもっともっと大きく立派な巨木になるでしょう。それと同じように富山大学も大きく大きく発展することを願ってやみません。

# 定年退職にさいして

理学部教授 川瀬 義之



昭和24年11月、創立間もなかった富山大学に赴任して以来丸40年の歳月が矢の様に流れ去ってしまった。私が小学校に入学した昭和6年には満州事変が起り、中学に進んだ12年には支那事変が勃発して本格的な日中戦争へと拡大して行った。中学では教練（軍事訓練）や体操が優先され、高校に入った年の12月には遂に日米戦争に突入して、いよいよ世界の多くの国々を敵とす戦争となりました。我々理系の者は大学卒業迄入隊は延期される予定でしたが、文系の人は途中で入隊さらには戦地への出征も予想しなければならなくなりました。

18年10月には大阪大学に進みましたが、戦局は次第に悪くなり、正常な講義や実験は1年半程で終り、其後は各講座に配属となり講座単位で各地に疎開する事になりました。交通機関も困難な中を度々実験機器の運送を手伝い、度々移動しました。最終疎開先の富山県伏木の王子製紙（現、十條製紙）の工場内の陸軍六研（青酸を蒸留していた）で終戦を迎えました。我々は秋から3年生になっていたもので、11月頃から大学に登校しました。理学部は大阪中之島のビル街にあったので焼失は免れましたが、ガスは不通で水にも不自由をし、卒業実験は入門程度に終わりましたが、各講座で一定しないため卒論提出も免除となり、21年9月に卒業となりました。

卒業後大学に残る希望を持っていたのですが、最低10年は無給を覚悟せねばならず、アルバイトも禁止されていたので、不本意ながら尼崎の工場に就職しました。約2年半で会社を止めて大学に戻り研究生になっていました所、丁度其頃各地に新制大学が発足し、先輩の福井先生が赴任されていたこの富山大学で職を得る事が出来ました。

我々の文理学部は母体が高校だったので、実験設備等は殆ど未だ整備されておらず、最初の1年は奥田にあった薬学部内の一室に間借させて頂きました。蓮町の校舎に戻りいよいよ実験を始めましたが、設備や器具等の不備が多く大変苦勞しました。更に我々は一般

課程も受持っていたので、多い時期には週2回の学生実験もあり、また毎期の試験期間には監督が10回以上も割当てられました。

20年代、30年代は全く冬の時代で、殆どの申請も文理学部なるがゆえに門前払いされ、一時期には2、3の専攻を残して後は一般課程だけになると言う話も流れました。その後も我々の有機化学分野では、薬学部から文献はじめ、元素分析、赤外、マス等多大の便宜を受けた事感謝しております。朝鮮戦争が勃発して多少景気も上昇して来ましたが、卒業生の就職は教員志望者を除いては殆ど不可能で、度々会社訪問に出掛けました。高度成長が始まってからも大会社では指定校制を取っていたので種々苦勞が多かった事を思い出します。37年3月には未完成の五福校舎に移転しましたが、完成迄に3回程にわたって建築が行われ、それに応じて度々移転をしました。

38年秋からは約1ケ年間パリ大学付属ラジウム研内のキューリー研で共同研究をする機会を得て、毎日彼等と一緒に化学実験はじめ生活を共にする事が出来たので、彼等の生活、考え方、国際性等を実感する事が出来ました。そこには付属病院もありフランスでのガンセンター的機関になっていたもので、医学への応用等についても関心を持ちましたが、言葉の問題もありもっと若い時期での海外生活が望ましいと感じました。

42年には教養部が分離して、化学専攻には物理化学、構造化学、有機化学、天然物化学の4研究室が出来ましたが、44年からは富大でも学園紛争が起り数年間は多事多難な年月が続きました。やっと52年に改組が認められて人文学部と理学部になり翌年には理学修士課程も併設され後には分析化学研究室も増加して名実共に充実して来ました。

顧みますと学生時代は全く戦争に影響され、終戦後も敗戦の虚無感、食料不足、貧困等で苦勞しましたが漸く平和な恵まれた時代になりました。皆様今後の御健康と御活躍を祈念してお別れの御挨拶を申し上げます。

## 退官にあたって

理学部教授 横山 泰



光陰矢の如く早くも定年を迎え、苦い思いは忘れ去り楽しい思い出のみ残ります。その初めは強い憧れと飛び級で北大に入ったことで、今はこの種の憧れも少く飛び級制度もなく時代を感じます。次は輝かしい研究の数々に魅せられてとび込んだ阪大での生活

で、勤務先は産業科学研究所と云い関西財界の寄附でできたものですが、やっていることは有機化学反応機構の研究という極めて基礎的なものでした。俊英集い仕事中心の張りのある忘れ得ぬ十数年でした。次は富大に赴任して間もなくの米留学です。かの国は能率本位、機械文明の乾いた国と聞いていたのに聞くと見るでは違い、広大な国土に恵まれたゆったりした（少くも当時は）国、人づき合いの良さに個人主義故か他人の生活に無用に干渉しない面もあって自由で仕事のし易い快適な生活でしたし、また給与がよくて有給休暇の一ヶ月を欧州旅行に当てることが出来ました。それも米人の中の唯一人の日本人のグループ旅行でしたので、欧米両域の文化や市民感覚の差の一端を感じると

こともできて忘れ得ぬ楽しい旅でした。最後は定年迄の十五年に汎る米海軍のDr.Kamlet, カリフォルニア大のProf.Taftとの共同の仕事です。これは高速道に入ったら隣りを走っていたという様な偶然の出会いでしたが、これも討論をしかけるという合図を送らなかったなら気付かずに過ぎていたかも知れません。なにせ速度無制限の高速道でナビゲーターも交替ドライバーもいる米、英、豪の大型車を軽で走り抜ける様なスリルと軽の馬力のなさからくるストレスで息切れの有様ではありましたが、それでも荒地を忽ち緑地にする研究の荒々しさと、少しの着想が広がりをもよおさせる楽しさの一端を窺えて楽しいものでもありました。今は独創的で個性的な仕事をグループで、地方色があり乍ら国際的な、しかもお金のかかる仕事を誰よりも早く仕上げるという以前より張りも夢も楽しみも多い時代になったと思われまふ。今後は皆様の御活躍と、学生を含めて富山大学の一層の活性化を風の便りに聞かせて頂きたいと存じます。最後に、豊かな自然と心情に満ちた富山の地でゆったりと好きに過ごさせて頂けたことを深く感謝致します。また仕事を夜遅く迄共にした卒業生の諸君とその卒業後の活躍も楽しい思い出の一つです。有難うございました。

## 退官にあたって

工学部教授 宇佐美 四郎



私は工学部工業化学科に環境化学講座が新設された昭和51年の9月に懶クラレから縁あって講座担当として赴任しましたので、13年半お世話になったこととなります。干支でいえば一回り以上になり決して短い期間だとは云えませんが、色々と解決してゆかね

ばならぬ事柄に追われた日々であったためでせうか、今振り返って見ると、実に早く、瞬く間に過ぎ去ってしまった感があります。

赴任しました時は事務机が一つボンとあっただけでした。また、新設講座とはいえ半講座制の形でしたから新設の特別予算も少なく、原子吸光分析計の購入で研究費は殆ど残らない状態ではありましたが、新出発の構想を一応立てていましたので比較的平静に対処して行くことができました。

3年后に皆様の御援助により、当講座にガスクロマトグラフ-質量分析計が設置されたところから講座らしい形態が整いはじめ、研究も順次軌道に乗って参りました。

昭和55年頃より石炭液化に関する学科内の共同研究、クラレケミカルKKとの環境対策に関連する共同研究、引き続き友人との錯体化合物による微量金属の濃縮研

究へと進展して行きました。当時、Cd汚染田畠の改善実態調査を卒論テーマに取り上げた時、田の泥の採取、その場所で生育した稲穂の採取のため車で高岡より婦中町、黒部市と何回も廻りましたが、ある夜、春風のそよぐ星空の下に弱々しく飛びかう二、三のホタル火がすごく幻想的に感じられたことが、強く印象に残っています。また、新規キレート樹脂の開発研究で、その応用として海水中に含まれるウラン（平均3.3ppb含有）の回収を手掛けた時、「富山湾から全世界の海のウランを全部回収してしまおう」などと学生と冗談をいながら、軽トラックにポリタンクを積み込み氷見海岸へたびたび海水採集に出掛けた頃がなつかしく思い出されます。

長い間進展がみられなかった工学部の移転問題が昭和57年頃より、急に解決の道が開けました。当時、学科主任を努めていた関係もあり、建物の設計、部屋の配置の打合せなど多忙でありましたが、活気のある希望に満ちた時期でした。

昭和60年化学系の移転が完了しました秋にトリウム科学センターから環境に関連した共同研究のお誘がありました。1000万円以上の内部装置付チャンバー、液体シンチレーションカウンター、X線光電子分光分析計など特殊機器が自由に使用できる魅力にも引かれ、既座に学生を派遣することに致しましたが、現在でもセンターで研究を継続しております。これがきっかけとなり、学会で核融合に携わって居られる研究者との交流ができるようになったことも大きい収穫でした。

昭和62年工学部内に全国の大学に先駆けて地域共同研究センターが設置されました。化学の分野でこの施設をどのように活用すればよいかなど先生方と討議して参りました。これが契機となり、企業との共同研究も芽ばえました。

工学部改組の話が出はじめた数年前は改組には学生、教官の増員は0で活性化させることを方針として検討が進められてきましたが、技術の急激な進展による社会状況の変化と大学内関係者の並々ならぬ御努力により、昨年改組で情報部門の増設が実現し、本年引続き化学生物工学科の増設が認可されました。バイオ部門は21世紀の技術改新の中核になると考えられているだけに、その第一歩が踏み出したことは工学部の将来に意義あることと思います。在任中に、これら新学科の方針立案に参画する機会が得られたことも幸運であったと思います。

廃液処理施設運営委員会には赴任した高岡時代から委員とし参画し、専門の先生方と交友を深めさせて頂いて参りました。昭和61年に新築の廃液処理施設は種々の方面から検討が加えられ、自動化された効率のよい装置になって居りますが、それらの建設経過を直接見聞することができて色々勉強になりました。

思いつくままに記述致しました。色々なこととの出会いのあった13年半でしたが、皆様の御好意に支えられ楽しく、また、有意義に過ごさせて頂くことができました。ここにご指導、ご支援をいただきました多くの方々に厚く御禮申し上げる次第です。

## 富山で暮らして三十余年

工学部教授 三上房男



富山大学で機械工学科を作るので来ないかと、お誘いを受けたのが、昭和30年の春でした。当時、東京工業大学の助手で、約8年経過しており、そろそろ次の段階を考えなければならぬ時期でもあったので、2、3年出かけてみるかと家内を説得し、秋もおわ

りに近い頃着任しました。信濃路を通るのも初めて、高さが2000メートルを越える山を見るのも、富士山を

除いては初めてでした。大した月給を貰うのでもないのに、そして、全く見ず知らずの世界で、新しい生活を始めるとゆうのに、全然不安を感じなかったのは、若かったとゆうことでしょうか。

当時、今は亡いある著名な評論家が、駅弁大学とか、デモ・シカ先生とか（私もその一人だったのですが）、けしからんけれどもなんとなく当を得ているような言葉を発明して、新制度の、特に地方の大学の先生方を悔しがらせていた時代でした。確かに、着任してみると、実験室は空っぽで、僅かに、どこかで寄付してもらったらしい、使い物にもならないようなポンプが一

台、隅っこの方に転がしてあったのを良く覚えています。

年度末になって、それも3月中旬にもなって、文部省から、どうゆう性質の金かわからないけれども、当時の金額で500万円ほどを廻してくれて、一夜着けもいいところ、大慌てで当面必要そうな物を買ったり、作ったりしたものでした。まだ、金属工学科の中の機械工学専攻とゆう名前であったのが、どうやら学生達の実験もできるようになり、機械工学科として一人立ちするには、学年進行のこともあり、更に4年ほどかかった筈です。

工学部が高岡から現在地へ移転したとき編纂された、「富山大学工学部史」とゆう1冊があります。今まで開いて見たこともなかったのですが、この一文を書くに当たって、昔を思い出すよすがに開いて見ますと、色々なことが、それこそ走馬燈を見るように次々と思い出されます。

昭和30年代の終わり頃「生産機械工学科」が設置されたのを皮切りに、続いて「化学工学科」、「大学院修士課程」、そして、「電子工学科」と矢継ぎ早に設置されました。工学部を富山キャンパスへ……と決議されたのもこの頃でした。

工学部の拡張が一段落着くか着かないかの時点で、例の学園紛争の嵐が吹き荒れ、今振り返ると、まさに、工学部のあの頃は Sturm u. Drang の時代であったように思われます。

紛争の嵐もどうやら過ぎ去って、いよいよ移転に全

力集中できるようになったのですが、高岡市がなかなか良い返事をしてくれず、結局移転が実現するには、ご承知のように、20年余の歳月がかかってしまったわけです。当時、新潟大学も同じような状況で、長岡市の反対でなかなか移転統合が出来ず、学会などで彼処の先生方に会ってお互いの不遇を慰めあったものでした。ところが、むこうは長岡に「技術科学大学」が出来ることになり、工学部の移転問題は、あっとゆう間に解決してしまい、こちらは取り残された悲哀をしっかりと味わわされた次第でした。

しかし、それも、関係された皆さん方の大変なご努力の結果、無事移転統合が実現し、最新の設備を持った素晴らしい建物に入った工学部は、次の大目標に向かって、新しい一步を踏み出したところです。当時学生であった方々が、中堅どころか、指導的立場で活躍しておられる現状を見ると、30年の歳月は長くもあり、短くも感じます。

この春で、デモ・シカ先生も完全にいなくなり、また、新装なった大講堂も機能し始めることになっています。恐らくは、あの評論家先生も、地下で、ご自分が開発された言葉の終わったことをお気付きになっていることと思います。

工学部の諸先生方を始め皆さん方には、折角精進されて、次に来るであろう第二のS.u.D.の時代を、大発展とともに乗り越えられることを心から期待して、この駄文を終わらせて頂きます。

## 回 顧

工学部教授 中 谷 秀 夫



終戦の年の9月に繰り上げ卒業で金沢工業専門学校を出て、11月に高岡工業専門学校の講師として着任し、ついで富山大学が発足するや引き続き工学部の助手として勤務することとなった。着任以来、激動の昭和の大半を生きながらえて来たが、気がつくとは

職期間はいつのまにか44年有余を数え、この3月末で定年退官を迎えることになった。

本学を去るに当たり、印象深かったもの、特記事項

らしきものを思い出してみたい。

まず、若かりし頃からの順に挙げてみると、乏しい国民生活、とりわけ厳しい食糧事情のなかにあつての教育と工専存続運動、六五三三から六三三四への学制改革、山岳部員の赤谷山での遭難、市街地での積雪約3mを記録した三八豪雪、教育と研究が中断した学園紛争、私にとっては充実した日々の原子炉研修、そして工学部の五福への移転実現……などである。

それらの中から、赴任当時の教育事情、学園紛争、原子炉研修の3つを抽出し述懐としたい。

<赴任当時の教育事情> 戦後数年間にわたる耐乏生活、とくに食生活では毎日が空腹との戦いであった。

「おしん」の大根葉入りの雑炊なるものは、上々の献立で、果てはサツマイモの蔓、茎、葉まで食べて空腹を満たしたものである。

このような苦しい食糧事情の中で、高岡工専は経済専門学校から転換したばかりでエンジニア育成の実験設備はゼロに等しく、その上、機器の新規購入は殆ど不可能な時代であった。したがって電気機器の実験は近くの工芸学校（現在 工芸高校）へ通い、電気通信の実験は金沢工専で御厄介に始末であった。

そこで、全教官は県内の企業は勿論のこと県外の旧兵器廠へ、超々満員のオンボロ列車（銃撃で破損した車両を修理した客貨車）に辛うじて乗り機器の寄贈収集に奔走した。私も旧呉海軍工廠へでかけ、多数の電気機器を載ってきた。

しかし、やっと収集してきたこれらの機器もそのままでは使えないので、教官・学生が一体となって、分解し実験目的に適う部品を集めて組み立て直さねばならなかった。その仕事を通して学生は少しでも学力をつけるため頑張った。

現在、電気機器実験室内メイン配電盤の近くに据え付けられている30HP-20KWの電動発電機はその名残りの筆頭で直流電源として今も快音を轟かせ実験・研究に役立っている。

上述のような実験装置作りは新制大学に変換後4～5年間も続いた。

〈学園紛争〉 昭和40年代の前半に起こった全国規模の学園紛争は富山大学にも波及した。中枢機関の学長室がある事務局は活動家学生によって占拠され、大学の運営は1年間ほど麻痺した。

このため、当時の全教職員、とりわけ補導委員の教

官達は学生対策に明け暮れた。私もその一員であった。私は、団交を要求する学生達がああ凄い気力と真剣な主張を学業に注ぐならば、活気に満ちた教育と研究ができるのにと、1日も早い解決を願っていた。

〈原子炉研修〉 昭和40年代の後半から50年代前半にかけて積算して1ヶ年半の間、茨城県東海村にある原研（原子力研究所の略称）キャンパス内の炉修（原子炉研究所の略称）で研修生活を送ることができた。

当時は運転中の原発が8基程度で、まさに原子力産業成長の最盛期であった。そのためか全国から20～30才台の若くて優秀な人材が炉修に集まってきた。

当然、私はごく少数の年長者であったが、若い研修生にまじっての講義や日常生活は大変に楽しい日々であった。忘れることのできないのは、原子炉の始動・出力上昇のテクニックを体験したとき、実測結果が炉理論とピッタリ一致したとき、生まれて初めて味わう感激・感動であった。寮生活で炉物理の難問を解き合った徹夜・徹夜の学習、早朝のランニング、チームを組んでの野球試合……なんでも進んで参加したものである。

原研側の多数の研究員とも知り合いになった。これを契機に研修課程修了後もガンマ線・中性子の炉計測分野で、原研との共同研究を約12年間にわたって続けることができた。

翻って現在の原子力開発を取り巻く環境には厳しいものがあり、いまこそが、真剣勝負の構えで安全性の確保に取り組むときであると思う昨今である。

最後になりましたが、今まで御世話になった全ての方々に深く感謝申し上げます、富山大学の益々の御発展を心から祈り申し上げます。

## 懐 　　し

工学部教授 柳 瀬 秋 夫



昭和21年9月、高岡工専に奉職以来40有余年、つい数年前まで退官など小生には全く無関係で他人事の如く思っていました。今度3月末をもって定年退官することになりました。

今度小生と同時に退官され

る中谷秀夫先生は私が新任当時講師として活躍なされ実に元気な先生と深い印象があります。先生には色々御指導を賜り、激励され共に将来を誓い合った当時懐しく思い出されます。当時私は先生というに程遠く、学生実験に関する事のみ直接に記憶ありませんが、実験室には実験器具らしきものは殆どなく、実験は隣接の高岡工芸学校の実験室をお借りし、或いは遠く金沢工専まで出向し学生実験をつづけた事等々……、

其後軍の拂下機器の再利用と、ともに逐次器具を取揃え、教室を改造し次第に実験らしき形体を整えていった事等、電気工学科の初期の頃が今更ながら臉に浮んで参ります。

勿論当時は筆記用紙も思う様に手に入らず、或る先生のレポート用紙を頂戴し用紙裏を利用させていた事は大変たすかりました。其他電気工学に関する専門図書が手に入らず先輩諸先生の蔵書の中谷先生と分担して夜を徹して書写した事など悲喜交々今は懐かしい思い出として甦えて参ります。

今を去る四年前の工学部移転に際し、大学関係、企業関係、同窓会その他諸関係の方々による上げての移転運動中、郷土出身の大政治家松村謙三先生に考朽化した建物を理由に協力方をお願いした処、かつての松下塾を引合いに出され、るゝ論旨なされた事を思い出し、ひとり感慨にふけりました事も強く印象に残りません。

たまたま、現在の高岡高等学校前を通る折、これらの思いを込めた40年間の出来事の痕跡を残した建物をすべて一瞬にして取り拂った作業を現実にもざまざと見せつけられたあの日の出来事、人によってはいろいろ

ろの見方もあるかと存じますが、今は退職しなされた同友のある方は大粒の涙し感極まっておられた事は私の一生忘れられない思い出となる事でしょう。

これまで私の人生の大半研究を続けてこられたのも以上の如きいろいろの出来事があり、五福移転を期に次第に風化し、忘れ去られ又新しい時代に継いで行く今後学部改革につづいて博士課程など幾多の問題が山積しております。

科学技術の急速かつ多様な展開、産業構造の変化、国際化の進展等、変遷期にある工業教育組織の編成が叫ばれている折、大学における工業教育の現状の問題と今後の課題等多難な問題が想像されますが大学関係教職員は勿論、学生諸君もあげて協力し合い、大学発展のために努力される様切に祈念致します。

終りに当り、これまでの道程は再三述べた如く決してスナリした道ではなく、心ならずもいろいろな過ちを踏み様々にご迷惑をおかけしたことへのお詫びと、多くの人々に支えられて今日あることの有難さを感じしみと思ひ浮べながら40有余年の出来事を胸に秘め老兵は大学を去っていきます。

人の世のなさはうれし有難し、

命のかぎり、仕へまつらな。 相馬御風

## 新任教官紹介

岩井 瑞枝 講師(人文学部) 元 11. 1  
昭61. 2 パリ第四大学文学部博士課程修了  
美術史博士  
担当:文化構造論

浅井 尚子 講師(経済学部) 元 11. 1  
昭63. 3 名古屋大学大学院法学研究科  
博士課程(前期)修了  
担当:民事法

吉田 雅巳 講師(教育学部) 元 11. 1  
昭63. 3 千葉大学大学院教育学研究科  
修士課程修了  
担当:附属教育実践研究指導センター

井上 正美 助教授(工学部) 元 11. 1  
昭35. 3 富山大学薬学部薬学科卒業  
薬学博士  
担当:無機工業化学

## 新任のご挨拶

人文学部講師 岩井 瑞枝



昨年11月1日付で人文学部文化構造論研究室に着任いたしました。専門は、フランス中世末期から近世初期にかけての美術とユマニズムです。どうぞよろしく願いいたします。

生まれて初めて富山駅に降りた昨秋、かつて学生時代を過ごした京都の街を走っていたのと全く同じ色調の路面電車を眼にして、懐かしい想いかられました。さらには曇天の下で着膨れている人々の姿が、その後留学生を送ったパリの冬の情景を髣髴させるではありませんか。従いまして目下のところ、記憶の中の空間と時間を彷徨しているかのような、不思議な感覚を愉

しませていただいております。

パリ留学中は、国立図書館か美術考古学研究所の図書館で日中を過ごすことが多かったわけですが、これらの公共施設では、日本でも尊敬を集めている高名な研究者やら自分の指導教授やらと席を隣合わせる機会が稀ではありませんでした。学生たちと同様に、彼らも早朝から忙しそうに目録を参照し、図書を請求し、書物のあいだに顔を埋めたりしておりまして、そうした環境、あるいは風景は、学問や研究生活、文化遺産といったことならについて、某かの感慨を抱かせずには措かぬものでした。

何はともあれ、浅学の身ではありますが、研究室の学生諸氏とともに、人間の視覚体験と精神体験の歴史に触れ乍ら、存在の真実について思索してゆくことが(始められたばかりの)課題です。

## 新任の御挨拶

教育学部講師 吉田 雅巳



昨年の11月1日に教育学部の附属教育実践研究指導センターに着任しました。よろしくご願ひ申し上げます。

これまで東京都の定時制高校で理科の指導をしながら、学業不振児の指導に関する授業設計、授業分析の研究を続けてきました。この現場経験を

生かして本学での研究・教育活動に貢献できればと思ひます。

着任してまだ僅かですが、周りの教職員の方から公私共にいろいろと気を使っただき、初めての土地での生活も家族一同特に不便を感じることなく大変感謝しております。

富山に来て最初に感じた印象は、その天候でした。朝、全くの晴天でも急に雲が現れ雨になることがよくあります。傘は必需品です。首都圏では朝の天気が崩

れることはめったにないので、当初は同じイメージで考えて随分失敗をせずぶぬれになりました。反面、都市化の程度については首都圏の住宅地と比べて大差なく、大きな距離を移動したことをあまり意識せず生活しています。

さて、以前の職場は教員室、研究室共にいつも生徒であふれていました。当時はあまりの騒がしさに鬱陶しくもなったのですが、本学に着任してからは研究室で一人で仕事をしていることが多く、確かにこの静寂はありがたいのですが時々物足りなく感ずることがあります。性分なのでしょう。あの喧騒がなつかしく思えます。次年度からは、本格的に私の職務が開始します。研究室をもっとオープンにして学生や教職員の方々に賑やかな雰囲気を作りたいと考えています。お暇なとき、機器の活用を考えられたときなどは是非センターの私の研究室に御来訪ください。よもやま話などいかがでしょうか。



## 新任のご挨拶

経済学部講師 浅井 尚子



富山駅から路面電車ではるかに霞む山並みを眺めながら神通川を渡ってゆくと、静かなたたずまいの富山市街は、私が育った頃の札幌の町に戻ったようで、心が安らぎます。晩秋の冷え冷えとした空の下でオンコ（イチイ）の実をとって食べたりしたことをふと思

い出しました。富山大学を初めて訪れた日、メインストリートのユリノキの鮮やかな黄色が印象的でした。

昨年11月に経済学部講師として着任いたしました。本学では経営法学科で民法を担当いたします。今までは不法行為法（特に事故補償法）を中心に研究してきましたが、これからは周辺領域に少しずつ関心を広げようと思っています。またせっかく経済学部にいるのですから、経済の勉強もできたらと思っております。法の経済的分析は今後ますます必要になるでしょうか

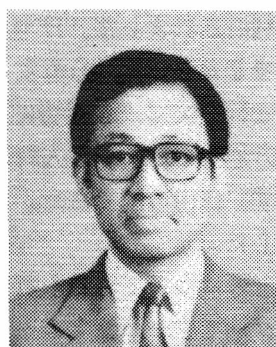
ら……。四月からは講義も始まり学生の皆さんと接することができるのが楽しみです。学生の皆さんには「誇りを持って、チャレンジ精神を忘れずに」よく遊び良く学ぶようにと希望します。これは社会人学生として研究者の道を踏み出した私自身への励ましでもあるからです。

美しい自然とおいしい食べ物に恵まれた富山、コンパ、ゼミ旅行など思いのままですね。私は動物や植物が好きなので（パディントンという犬、ドン・ガパチョという猫がいます）、雷鳥やかもしかの野性のままでの姿を是非一度みたいと思います。

富山大学に来てまだ日が浅いのですが、夜遅く帰宅するときもまだキャンパスが明るく人の気配があるのは良いものです。また、学生会館のまわりで、練習中のサクソやドラムの音色を聞くと1960年代の学生気分に戻ります。古き良き時代の雰囲気を残したこの大学でよりよい日々を過ごしたいと願っています。どうぞよろしく願いいたします。

## 新任の御挨拶

工学部助教授 井上 正美



工学部工業化学科第三講座無機工業化学担当助教授として11月1日付けで着任致しました。私は、12年前、本学薬学部が新設の富山医科薬科大学薬学部へと移行したことに伴って転出致しましたが、此度、ご縁があって戻って参りました。この様な訳ですから

必ずしも新任とは云えないのですが、まずは御挨拶申し上げます。

工学部をはじめとして各学部には以前からお付き合い戴いている教職員の方々がいっぱいいますので、私にとって懐しさもあり、また、心強く思っております。久し振りに校内を一巡しますと、一昔前には細々としていたメインストリートの並木、外周の桜が立派に成

長して落ち着いた雰囲気を与えていますし、美しい洒落た新建築物がそこここに在って、教育・研究の環境が各段に整って来たなと云うのが第一印象です。

正門から入って最も奥に位置して新造の工学部のスマートな校舎がありますが、その工業化学科の2階に一室を戴きました。窓外に美しく紅葉した立木と夕日に映える呉羽山を眺めていますと豊かな自然に恵まれた大学であることを改めて感じます。

私の研究は、特定の化学反応を仲介する金属種を見い出してその機構を調べるものです。そのために守備範囲が広く、無機化学をはじめ、有機化学、界面化学とも関連があって興味あるテーマには事欠きませんが、反面、最近の各分野の急展開には目が回りそうです。この様な時に異った専門分野の先生方とお近付きになれることを嬉しく思っております。幸い、私の必要な機器と設備も揃っていますので張り切っております。

もう一つの印象は工学部生の男っぽさでしょうか。薬学部では半数以上が女子学生でしたから当然かも知れませんが。学生諸君の若さ、恵まれた智力と体力に大きな期待を寄せている次第です。

すっかり様子が変わって勝手の良くわからない校内を右往左往する毎日ですが、皆様方との一層の交流をお願い致します。

## ◆ 海外研修記

### 思い出のまま

理学部助手 小松 美英子



文部省長期在外研究員（甲種）として、平成元年1月15日から10月14日まで棘皮動物の生殖と発生の研究のため、アメリカ合衆国とカナダへ出張して参りました。南フロリダ大学（フロリダ州、タンパ）に約6ヶ月、アルバータ大学（カナダ、エドモントン）に

70日、そしてワシントン大学フライデイハーバー臨海実験所（ワシントン州、サンファン諸島）に20日間滞在しました。結果的に冬には暖かいフロリダで、夏にはカナダで過しましたが、それは研究動物のヒトデのメキシコ湾での生殖期が春のためです。ほかにウッズホール海洋生物学研究所（ボストン）、スミソニアン研究所国立自然博物館（ワシントン D. C.）を訪れ、研究者とお会いしました。また、学会でドルフィンアイランドシーラボ（アラバマ州）へ、研究連絡でワシントン大学（シアトル）とバンフィールド臨海実験所（バンクーバー島）にでかけました。

向こうでの滞在中の身分は visiting professor という扱いでしたが、実力を示すことにより認められる競争社会の一員として扱われたことを意識しない訳にはまいりませんでした。南フロリダ大学のhost、ローレンス教授は学術誌 Marine Biology の論文のレフェリーに2回推薦し、その機会があったことを喜んでいるようでした。また、アルバータ大学のチア教授は、短い滞在にもかかわらずローレンス教授と私の共同研究を意識し、それ以上の成果をアルバータ大学で上げることを希望しておりました。彼らに雇れているのではないと自負していたのですが、結局彼らのペースに乗せられてしまったようです。

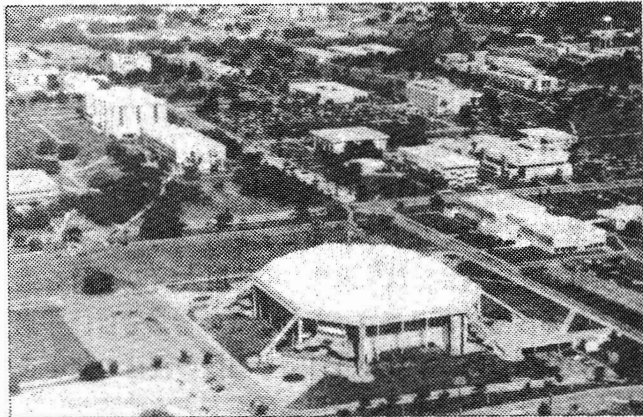
お陰で、世界の第一線で活躍する研究者の仕事ぶりを篤くと観察できました。彼らは研究業績で評価され

るため自己のアイデアをいかに証明するかを考え、短期間にユニークで質の高い論文を発表することに情熱を持っています。実験結果が出た時にすぐ投稿できるように、実験を始める前からすでに論文が作られているという噂は半分本当のようです。

南フロリダ大学はキャンパス内の女子寮の特別室の2DK（2台のベットがある約15畳相当の寝室、10畳の居間、冷蔵庫付のキッチン、バス・トイレ）を月約350ドルで貸してくれました。採集のこともあり車をレンタルし、駐車許可証をキャンパスポリスオフィスに申請しました。キャンパスは1,700エーカー（約7km<sup>2</sup>）と広大ですが、駐車規制は徹底しております。申請者はスタッフ、自宅通学生、訪問者、業者など7種に区分され、許可証のタイプが異なります。そして、その区分ごとに駐車場が決まっています。許可された以外のところに止めますと、見回りの警官にチケットを切られ、罰金です。学生は年間40ドルで許可証を買います。私も有料であると言われていたのですが、その他に区分され、無料であると判断されました。日本の習慣のようにバックで駐車しましたら、見知らぬ女子学生が頭から入れておかないと罰金ですよと親切に教えてくれました。駐車場は一方通行で、頭から入れておくのが決まりたと言うのです。自由の国でさえ、キャンパスの駐車規制がありました。

多くの学生や研究者から、博士号について尋ねられることがよくありました。ドクターですか？論文のタイトルは？修得された大学は？などの質問です。日本ではそのようなことはほとんどありませんが、彼らが博士号修得をいかに意識しているかの表われと思いました。免許のように一種の資格として重要視されているようです。その反面、柔軟な一面があります。それは、アルバータ大学で非公開の修士論文審査会に、大学の正式な事務手続によって特別出席を要請されたことです。審査論文が私の専門に近いこともありました

が、7名の教授と共に口頭発表を聴き、審議に加わり  
ました。勿論、合格・不合格の投票権はありませんで  
したが、私も20分間質問しなければなりませんでした。



南フロリダ大学のキャンパス

このように、日本では予想もできなかったいろいろな  
ことを経験しましたが、これらのことを意義ある体験  
として今後の教育と研究に生かしてゆきたいと思ひます。



南フロリダ大学の駐車案内書の表紙  
(雄牛は体育会のシンボル)

## 黒田講堂の落成式について

富山大学黒田講堂は、昭和32年11月、コクヨ株式会  
社の創始者故黒田善太郎氏の御寄附により建設されま  
した。

建設以来30年以上の経過とともに建物の老朽化が進  
んできましたが、このたび黒田家並びにコクヨ株式会  
社の全面的な御協力により新築されることとなりました。

昭和63年10月の着工以来約1年2カ月の工期をかけ  
て、近代建築の粋をこらした黒田講堂が完成し、平成  
元年11月29日(水)に文部省、黒田家、コクヨ株式会  
社をはじめ、学内教職員、富山県・市等関係者ら約250  
名の出席を得て、落成式が挙行政されました。

黒田講堂は、500席のホールと最大104人収容できる  
会議室が整備されており、白を基調としたユニークな  
外観で学内では一際目立つ建物に生まれ変わりました。

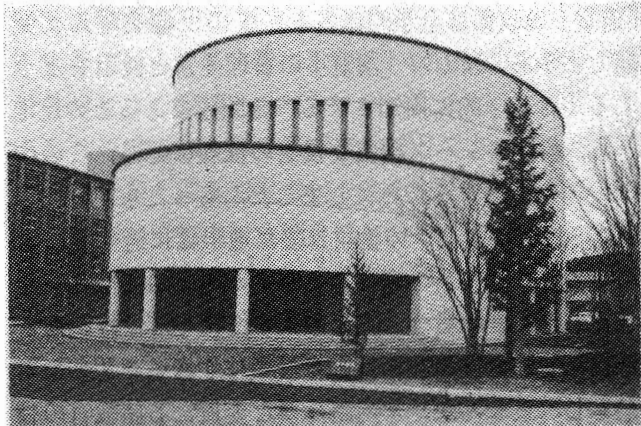
落成式に先立ち、黒田講堂内エントランスホールに

おいて、テープカットが行われた後、来賓が順次入場  
されました。

次いで、黒田講堂ホールにおいて黒田講堂落成式が  
挙行政され、大井学長から、新しい黒田講堂の有効な活  
用を図り、特色ある大学の創造と学術の研究、教育に  
努め地域社会の産業、文化の進展に寄与するとともに、  
開かれた大学を目指し、一丸となって邁進していきま  
いとの式辞が述べられました。

また、寄附者の黒田会長からは、郷土富山を愛する  
先代の遺志を継ぎモダンで立派な講堂が完成したこと  
を大変喜んでおり、この講堂を富山大学独自の教育や  
伝統ある学風の振興に役立てていただきたいとの祝辞  
が述べられました。

落成式終了後は、出席者に講堂施設の案内を行いま  
した。



黒田講堂の全容



ホールにおける落成式

# 黒田講堂の管理運営について — 中間報告 —

黒田講堂管理運営検討委員会委員長 武 暢 夫

富山大学黒田講堂（以下、「講堂」と略称）はすでに改築が終り、その利用を待っているかのような姿を見せています。昨年11月29日には「講堂」の落成式が行われ、同12月15日、「講堂」は施行業者から大学側に正式に引渡され、続いて本学の教職員・学生に暫時公開されましたので、その内部を御覧になった方も多いかと思います。

しかし、「講堂」の本格的使用にいたるまでには、それなりの準備が必要です。技術的には、内部諸設備を試動調整し、順調な稼動のために万全を期さなければなりません。それには、本年4月頃までの期間を要するという事です。他方、これだけの施設を有効適切に利用していくためには、「講堂」の管理運営と利用の仕方についての規則を整備しておくことも必要となります。この規則の検討は、昨年5月26日の評議会決定によって富山大学黒田講堂管理運営検討委員会（以下、「委員会」と略称）を設置し、この「委員会」で行うことになりました。

「委員会」は昨年7月31日に発足し、同日付の学長諮問にもとづいて「講堂」の使用規則等の検討を始めました。この諮問によれば、委員会には昭和62年10月2日付の黒田講堂改築専門部会答申（以下、「答申」と略称）の趣旨を尊重することが求められています。そして、この「答申」の趣旨とは「講堂」の目的として有効多目的利用を考えるということであり、「答申」はその内容を「Ⅰ 大学・学部等行事関係」、「Ⅱ 研究関係」、「Ⅲ 課外活動関係」に大別し、それぞれ細かく例示しています。

前記学長諮問はまた、「各般からの意見が反映されるよう実践的な調査検討を行う」ことを要望しています。「委員会」では、教職員・学生の意見の汲み上げ方如何は検討事項として確認されておりますが、この点については後でふれましょう。

「委員会」は他の諸大学の講堂使用規則等を参照しつつ、本学の実状に応じた規則案を考え出すことにし、まず使用規則等の大綱を決めて、これを成文化し、次いでこれに対応する使用細則を考えるという順序で検討を進めていくことにしました。講堂の管理運営と使用に関する規則は、(1) 運営規則、(2) 使用規則、(3) 使用細則から成り、そこに盛られる事項は講堂の

大小や大学の規模に差はあれ、ほぼ共通であり、各大学の実状に応じて、個々の問題の処理の仕方に違いがでてくるということになるでしょう。特に、本学の「講堂」のように多目的利用を趣旨とする場合には、やや多くの問題が生じてくることが予想されます。

現在、「委員会」は「講堂」の使用大綱の検討を進めている段階にあります。これまでの審議では、「講堂」の使用日時、すなわち日曜と国民の祝日の使用をどう処理するか、平日の使用時間帯をどうするか、また、使用料の徴収について、これを学外者の使用の場合に限定するか否かという点で「委員会」全体の合意をみるにいたらず、さらに審議を重ねる必要があるものと思われまふ。なお、「講堂」の使用料はすべて国に帰属するのであり、したがって、「講堂」の使用に関わる費用の殆んどは全学の共通経費によって負担されねばならないことをつけ加えておきます。その他の項目についてはほぼ合意を見ましたが、その細目についてはなお検討の必要があります。

学生の意見の聴取方法については、昨年12月1日の第3回「委員会」で議題として提起されましたが、ここではまだ使用大綱の本格的な審議に入って、いわば入口で終わった段階であり、「委員会」ではもう少し審議を進めてから検討すべきであるとの意見が多く、次の機会に持ち越されました。しかし、問題を有耶無耶にすますつもりはなく、近いうちに具体的に検討されることになるでしょう。

「委員会」の検討状況については、その都度、各学部、及び教養部の委員から各教授会に報告されているはずであります。しかし、今さらいうまでもなく、「講堂」の改築は全学的にさまざまな反響を呼んだ問題ですから、新しい「講堂」の管理運営と使用をどうするかは全学的に周知させるべき問題であるとの見地から、学園ニュース編集委員会の依頼に応じ、この中間報告を発表することにしました。もっとも、現在のところ、「委員会」の検討はまだ道半ばに達せず、この報告は中間報告の名に値しないかもしれません。

たしかに、委員会の発足以来すでに半年を経過し、それにしては委員会の活動は緩慢にすぎると思われるかもしれませんが、学内諸行事と委員たる諸教官の授業等の合間を縫って「委員会」を開くには、これで精

一杯でした。もちろん、「委員会」は1日も早く原案を作成するよう努力せねばなりません、多目的利用を趣旨とする「講堂」は教職員・学生のさまざまなグループが利用することになりますので、その立場や考え方に応じていろいろの要求がでてくるものと思われる。

したがって、「委員会」は拙速を避け、できるだけ

多くの意見を検討、調整し、公正妥当な利用方法を求めていかねばなりません。もっとも、この報告を掲載する「学園ニュース」が刊行される頃には、「委員会」の検討はやや進捗していることでしょう。また、そのように努力しております。

全学教職員・学生の皆様の御理解と御支援をお願いする次第であります。

## 真ごころからの感謝

外国人留学生（経済学部） 鄒 姫（中国）



日本へ留学したいと長年念願しておりました。美しい桜、秀麗雄大な富士山、日本の文化、先端技術などすべて私の見学、勉強したいものでした。しかしいざビザがおりて、これからすぐ行けるとなるとためらい始めました。

初めて行く日本の生活に慣れるでしょうか。無事に順調に勉強できるでしょうか。留学生の不幸な事件も聞いていますので、上海空港に近づくにつれて、恐怖の気持で一杯で、うれしい感じは消えていきました。こんな気持だったのでカバンの一つを空港に忘れてしまいました。

しかし列車が富山駅に着くと、私の保証人青山啓七先生がすでに改札口にお出迎えにいられていました。その青山先生の慈愛に充ちた笑顔と眼差しが、私のすべての恐怖感や不安を癒してくれました。こんな立派な素晴らしい方に御世話して頂けるなら、何も心配はいらない。その時どんな困難をも克服して勉強すると決心しました。

半年に近い留学生活における、青山先生と奥様の至れり尽せりの親切といたわりに、私はただただ真ごころからの感謝が一杯で涙が出るほどです。富山駅で青山先生に迎えられお宅に向う途中、私が心配してした借家について先生にお聞きしました。その時先生は微笑みながらお答えになりませんでした。車が止まり、下りると面積××坪の敷地に寝室、読書室、キッチン、ダイニングルーム、浴室すべて揃えている住宅を案内して下さいました。先生は私の半年前の住宅で、あなたに無償で提供しますよとおっしゃいました。先生は

非常に博愛心に富んでいる方で、過去にアメリカ、韓国などからの留学生も世話されており、自宅に2年間も下宿させ、勉強させていたとお聞きしました。さらに私を感激させたのは先生と奥様が歯ブラシ・タオル・電気用品・自転車などを一切用意して下さいましたことです。

先生ご一家の熱心なお世話で富山についてすぐ気分が落ち着き、予定の研修計画一責任原価、管理会計について勉強し始めました。私は自費留学なので、当分の間経済的に困るだろうと青山先生が案じて授業料も立て替えて下さいました。そしていつも必要な生活用品を適時に送って下さいました。晩秋のある晩私が勉強していると、家のベルが鳴り、ドアを開けると先生と奥様が暖房用のストーブ、服装などがかついで寒い秋風の中立っておられました。お二人の白髪が風になびいているのを見て私の目頭が熱くなりました。

私が生活の面で青山先生ご一家の至れり尽せりのお世話を頂いているのと同時に、研修の面では経済学部の教務係、学生係、教官と学友の皆様のお世話を頂いています。とくに私の指導教師である武脇先生から熱心な御指導を受けています。武脇先生は知識が豊富で優しく近づきやすい方です。私の疑問について何回も詳しく説明して私が分るまで教えて下さいました。また御自分の蔵書を私に貸して勉強させて下さいましたので、私の研究計画は順調にはかどっています。

武脇先生のほか榊原先生、中村先生、田中先生、松岡先生、和合先生……いちいちあげられませんが皆様にも真ごころからの感謝を捧げたいと思っております。

私は富山に来てまだ五カ月足らずですが、ここのすべてを愛するようになりました。景色が美しいばかりでなく、ここの人々の心が一層美しいからです。他の

中国留学生と同じように、日本人の美しい友情に感激して、一生懸命勉強しています。非常に残念なことは、日本語ではまだ私の気持ちを充分表わすことができない

ことです。世界に平和を人々に愛をと心から祈り“謝謝了（ありがとうございました）”で失礼させていただきます。（1990年1月10日）

## 臨 別 述 懐

外国人留学生（教養部） 高 立（中国）



時は、水が流れるように速いもの。富山大学へ留学して、あっという間に、一年三ヶ月経ちました。その間に、いろいろなことを学びました。いろいろな体験をしました。結論的には、「富山大学に本当に来てよかった」と思います。美しい自然と温かい人情がある

富山、毎日希望と張りがある留学生活は、忘れがたい印象を残してくれました。

初めて富山に来て、下宿したのは、仏教信者の赤江さんの家でした。新湊に住んでいます。私は、半年間御家族と同じ生活をしました。とても親切にしてくださいました。大学と距離的に遠く離れていたため、大学の留学生会館に移りましたが、今でも電話がかかって来て、時々新湊へ「帰り」ます。

大学では、勉強と生活の面で、先生たちや留学生係の方がたから、一方ならぬお世話をうけました。教務係の渡辺さんは何回も新湊まで私を送ってくださり、また留学生会館へ引越したときには、わざわざテーブルやソファを持って来てくれました。私は図書館の検索コンピューターが使えず、書目を調べるのに困っているとき、図書館の皆さんが面倒を嫌がらずに何回も助けてくれました。私は日本に来た最初の頃、日本語がほとんど解りませんでした。そのため、気賀沢先生の奥様が一週間に二回教えてくださったり、後には元附属中学校副校長中山守之一先生が一週間に一回小学校の国語教科書をテキストに個人授業をしてくださいました。今では読むこと、聞くこともほぼ完全にできるようになりました。まだ自分の思っていることを十分に表せないことはありますが。

私の研究題目は、中国と日本の仏教を中心とした文化の交流史です。始めの一年には、主に東洋史と日本史を勉強しました。日本の大学の教育方法が中国と違

うのは、たとえば、日本の場合、先生がいろいろな方向を示して、学生に自分で選ばせて、歩いていかせる、しかし中国では、先生が一つ道を選び、そこを学生をつれて歩いていくわけです。気賀沢先生の東洋史演習では、はじめ学生一人が発表し、それをうけて皆が次々に質問しそして答える。これは各人の才能を高めるのにたいへん役立つと思います。小谷先生の東洋史概説の授業は、いろいろ学説学識や研究状況を紹介され、研究の視野を開かせてくれました。日本の歴史の研究については、私は小学館が出している《日本の歴史》第三、第四の巻を読みました。これは内容が豊富で、日本の奈良、平安時代の歴史（すなわち中国の唐、宋の時代）を理解する上で大変役立ちました。これをふまえて私は、一夏をかけ、四萬字のレポートを先生に提出しました。現在、日中仏教交流の概況を研究し、入唐求法僧円仁について論文を書いています。これを書き終わったら、日中仏教交流のより詳しい年表を編集するつもりです。

日本に来て一年余り、大学で研究する一方、私はまた日本の有名な古寺にも実際に訪問し、資料を捜しました。行ったところは奈良の法隆寺、東大寺、唐招提寺、薬師寺、京都の清水寺、本願寺、金閣寺、福井の永平寺などなど。富山でも各宗派のお寺十数ヶ所を訪問し、報恩講や涅槃会などの法要に加わったり、本願寺関係の方々の指導を得たし、五百羅漢の長慶寺の奥様と親しい友人になりました。

この文章が発表されるころ、私はたぶん富山大学での留学生生活を終え、帰国することになっていると思います。白雪と緑の美しい山・清く澄んだ川、美味しい水に美味しいお米や魚のある富山、その富山に一つのいきいきした学術的雰囲気包まれる大学があり、温かい人情をもつ人々が住んでいる、それらの中で一年半という長く楽しい留学生活を送ったこと、それらはいつまでも私の脳裏に刻み付けられ、忘れることはないでしょう。

さようなら、とやま、そして富山大学。  
さようなら、尊敬する先生方、親愛なる友達。  
本当にありがとう。

## ◇◆◇◆◇ 学 生 部 だ よ り ◇◆◇◆◇

### 平成3年度富山大学入学試験について

本学の平成3年度入学試験の実施方式については、去る10月20日開催の第9回評議会において、従来と同様に連続方式の「B日程」で実施することが決まりました。実施期日や教科・科目については、7月末まで

に選抜要項として発表します。

また、入学者選抜の多様化の観点から、新たな推薦入学制度導入等の検討も進められており、決定次第発表する予定です。

### 「富山県留学生等交流推進会議」が発足

富山県留学生等交流推進会議の設立総会が平成元年11月21日（火）富山第一ホテル（春日の間）において、国公立大学、国の機関、地方公共団体、経済団体、国際交流関係団体等の代表者及び学識経験者の出席のもとに開催されました。

この推進会議は、留学生等の教育を担う高等教育機関をはじめ、国、地方公共団体、経済団体、国際交流団体等が密接に連携・協力しあい、今後ますます増加が予測される留学生等の受入れ体制の整備と交流活動の推進等について具体的方策を協議し、あわせて地域住民の国際理解に寄与することを目的として設立されたものであります。

設立総会では、設立発起人を代表して大井信一富山大学長の挨拶、続いて西村元彦文部省大臣官房審議官の挨拶、田中寿副知事並びに原谷敬吾とやま国際センター理事長からそれぞれ祝辞がありました。

引続き設立総会に先立ち、議長に富山大学長が選出された後、議事に入り、第一号議案から順次審議され、事業計画など全て原案どおり承認されました。

また、推進会議の事業計画の具体的事項については、参加団体等実務担当で構成する運営委員会で検討していくことが合意されるなど、盛会裡のうちに設立総会が終了いたしました。



設 立 総 会

### 学生証の査証について

1・2・3年次生は、各学部の学務係（教養部及び経済学部においては学生係）で、平成2年度の査証を

行いますので必ず受けて下さい。

なお、査証を受けない学生証は無効となります。

## 在来生合宿研修について

平成元年度在来生合宿研修は、1月7日から11日までの5日間にわたり102名の学生が参加し、志賀高原ブナ平スキー場を中心に行われた。

研修はスキー講習を中心として、全体会、分科会等が行われたが、スキー講習は幸い好天にも恵まれ、11名の指導者のもとに充実した研修が行われ、全体会で

は映写会が、また、分科会では11班に分かれ「余暇と活力」について熱心な討論が行われ、多大の成果をあげて無事終了することができました。

これもひとえに、御指導いただいた諸先生方並びに体育会事務局員諸君のおかげと深く感謝いたします。

### キャンパスの草本誌（2）

#### ギョウギシバ (*Cynodon dactylon*) イネ科

— 雪は芝生を保護する —

ギョウギシバは日当たりのよい道端や、グラウンドの周辺などで生育している。注意して見ないと、普通のシバ (*Zoysia japonica*) と区別がつかないが、道端の芝草は、ほとんどギョウギシバでシバは少ない。

ギョウギシバは茎が地面をはい、節から枝とひげ根を出してふえる。葉は短い線形で先がとがるが、シバのように鋭くない。花期は6-8月。節から高さ20cm内外の花茎を直立させ、その頂に掌状に開いた花序をつける。花序の枝穂の数は3-7個で長さが4cm内外。この掌状花序がギョウギシバの特徴で、この点、シバと著しく異なる。シバの花序は円柱状で直立して一個だけある。また、シバの茎は左右交互にジグザグ状に伸びるが、ギョウギシバはほぼまっすぐ伸びる。

ギョウギシバは代表的な被覆植物 (cover plants) で、近年、盛んに使われているパーミュエダグラスと呼ばれる芝草もこの仲間。和名をアフリカギョウギシバ (*C.transvaalensis*) という。これらは、シバと共にスズメガヤ亜科に属し、夏が暑く冬寒い日本の本州の気候に適している。春から夏、温度が上がると成長し、秋に衰え、冬には葉を枯らして休眠する。ヨーロッパ

の常緑型の芝草に対してこちらは夏緑型。しかし、多雪地帯では、積雪が休眠を寒風から護るので、太平洋側のように極端に枯れない。春、機上からゴルフ場の芝生を見比べると、その違いがよく分かる。

本学キャンパスでは、グラウンドにギョウギシバが見られる。また、構内の芝生もギョウギシバの仲間のアフリカギョウギシバのようである。

教育学部教授 長井真隆



ギョウギシバの花序。モノクロはシバの花序。



### 学園ニュース編集委員



学生部長	瀧澤	弘
人文学部	河村 貞	枝
〃	山口 幸	祐
教育学部	呉羽	長
〃	原田 嘉	昭
経済学部	山崎	清
〃	相澤	吉 晴

理学部	松本 賢一
〃	広岡 公夫
工学部	島崎 長一郎
〃	杉本 益規
教養部	高安 和子
〃	山本 孝一